

第10回 一人前のキリスト者の生活とは

第5章11節から6章8節まで 一人前のキリスト者の生活

- 5章11 このことについては、話すことがたくさんあるのですが、
あなたがたの耳が鈍くなっているので、容易に説明できません。
- 12 実際、あなたがたは今ではもう教師となっているはずなのに、
再びだれかに神の言葉の初歩を教えてもらわねばならず、
また、固い食物の代わりに、乳を必要とする始末だからです。
- 13 乳を飲んでいる者はだれでも、幼子ですから、義の言葉を理解できません。
- 14 固い食物は、善悪を見分ける感覚を経験によって訓練された、
一人前の大人のためのものです。

- 6章1・2 だから私たちは、死んだ行いの悔い改め、神への信仰、
種々の洗礼についての教え、手を置く儀式、死者の復活、
永遠の審判などの基本的な教えを学び直すようなことはせず、
キリストの教えの初歩を離れて、成熟を目指して進みましょう。
- 3 神がお許しになるなら、そうすることにしましょう。
- 4 一度光に照らされ、天からの賜物を味わい、聖霊にあずかるようになり、
- 5 神のすばらしい言葉と来るべき世の力とを体験しながら、
- 6 その後に墮落した者の場合には、再び悔い改めに立ち帰らせることはできません。
神の子を自分の手で改めて十字架につけ、侮辱する者だからです。
- 7 土地は、度々その上に降る雨を吸い込んで、
耕す人々に役立つ農作物をもたらすなら、神の祝福を受けます。
- 8 しかし、茨やあざみを生えさせると、役に立たなくなり、
やがて呪われ、ついには焼かれてしまいます。

<混乱し墮落しつつあった教会に向けて>

今回の5章の11節からしばらくの間は、「一人前のキリスト者の生活への導き」、もっと明瞭に言えば、「現在墮落しつつあるキリスト者への警告」をここに挿入しなければ、話が進められないような危機的状況が、かつての教会内にあったことを、私たちに教えている箇所です。

教会とは本来、ある固定化された概念や理論の具現であつたり、或いは、構造物や建築物であつたりするのではなく、教会は、主イエスの霊が主導され、共に生き働いておられるところなのです。ですから、状況に応じて、様々な問題、課題が主によって与えられ、それらによって、信仰が試されたり、篩（ふる）われたり、信仰における適切な処置や対応が求められたり、致します。

そして、本当の勝利に輝く教会、「栄光の教会」は、天に在すイエス・キリストのもとにある「一つなる神の教会」であって、私たちキリスト者はその教会に共に集う日を待ち望みながら、現実には、「御国の雛形なる教会」にお仕えすることを、喜びとしているのです。

ですが、この手紙を受け取った当時の教会の人々は、戦いの渦中におかれていました。しかも、その戦いの相手というのは、自分たちが歩んできたユダヤの歴史、文化、伝統を背景として作り上げた制度、慣習、常識であったのです。特に、自分たちがこれまで最重視してきた律法遵守における裁きの罪が、著者の目には非常に明確になっていたと思われます。そんなことを感じ取りながら、この5章の11節からの御言葉を読み進みたいと思います。

第11節から14節

このことについては、話すことがたくさんあるのですが、あなたがたの耳が鈍くなっているので、容易に説明できません。 実際、あなたがたは今ではもう教師となっているはずなのに、再びだれかに神の言葉の初歩を教えてもらわねばならず、また、固い食物の代わりに、乳を必要とする始末だからです。 乳を飲んでいる者はだれでも、幼子ですから、義の言葉を理解できません。 固い食物は、善悪を見分ける感覚を経験によって訓練された、一人前の大人のためのものです。

<耳が鈍くなっている>

ここで注意を喚起している「**耳が鈍くなっている**」とは、神が与えられるすべての御言が、生き生きと、あなたがたへの「恵み」として響かなければならないのに、ここでは未だ、その意味をよく咀嚼できない状態にあることを意味します。

つまり、勝手に、「これは恵みだ」、「これは神の刑罰だ」、「これは神との対峙だ」というように分別し、神の御言を自分で限定づけてしまっている現状のことです。そういう中で、いくらイエスの福音の真理が語られても、皆、自分たちの尺度で量りますから、話が通じないと言っているのです。

そして、あなたがたの耳が鈍くなっている結果、もう信仰歴では、教師になっていなければならない段階なのに、まだ初心者のままでいる。善悪や、聖濁を見分ける目さえ、持ち合わせていない。別な言い方をすれば、むしろ初心者である立場が都合よいと甘んじ、そのことが自分自身を成長させないことには、気づいていないのです。

ですから著者は、「あなたがたは一步も前進していないではないか」と迫るわけです。「信仰の初歩に留まっている限り、あなたがたは、固い食物ではなく、乳を必要としている者だ。」と。

言い換えれば、「神が何を私に求めていらっしゃるかよりも、神に『あなたを愛していますよ』と言われることを好んでいる初歩の段階にある。神はそんな私たちに『自律して、責任をもって隣人のために仕えなさい』と仰るけれども『イエスは、私のために死んでく

ださった』という信仰の出発点にいつまでも留まり続け、それが有難いと言い続け、主の二千年前の十字架だけを想い続けている」と、告げているのです。

何かこの辺を読んで来ますと、現実の私たちの姿を如実に指摘されているよう思われるのです。

イエスは実際、そのようなことだけを求めてはおられない、あなたがたが十字架のイエスを基として、もっと前進することを求めておられるのだ。それでは、主は私たちに、完全であることを求められるのだろうか？ この手紙においては、「いや、あなたがたは完全でなくてもいいのだ」と言っているのです。そんな例示が、手紙の後方には沢山出てまいります。

例えば「アブラハム」。 神の御声を聞いて出かけていったけれど、「その信仰は完全ではなかった」のです。 ある段階までは、常識を優先して、神の御言を疑い続けていたのです。

「神が約束されたからといって、老人に子どもなんか授かるはずないじゃないか。空の星を見せてくださっても、私に希望なんか持てないよ。広い砂地を見せられて、その砂の粒ほど子どもが増えるなんて言われたって、信じ難いことだ。・・・でも、あなたがそう仰るんだから、一応聞いてはおきましょう。」という程度の信仰であった。

けれども、神が「行け」と言われるところに、実際、彼は出ていきました。その中で彼は養われ、培われ、成長していったのです。ですから、信仰の過程はそういうものだ、ということはこの箇所では指摘しようとしているのです。「同じところに留まり続けている信仰は、本当の意味で神を信じる信仰にはなりません」と、著者は言うのです。

なかなか難しいことを述べています。しかも私たちの現状をぐさっと刺すような言葉が沢山用いられているのです。私はここを読みながら、「私たちが、神の御前にいつまでもこんな状態にいるのは、何故なのだろう？」と考えてみるのです。すると、幾つかの点がここで指摘されていることに気づきます。

マルチン・ルターは、「あなたがたが耳が鈍くなっている」という箇所を「あなたがたは無気力である。そして、注意深く熱心に神の言葉を聞こうとしないで、自分サイドの物差し、自分サイドの升で量って、自分に相応と思われるものだけを、受け取っている。」と書いています。

これは興味深い表現ですけれども、結局、私たちは無気力で、自分の思い通りにやっているだけということです。言い換えれば、座り込んだまま、向こうからやって来る恵みと思えるものだけを自分のものになっている、という怠け者なのだ、とルターは指摘しているわけですね。

そんな風に怠けていられるのは、私たちが本当の飢え渴きを知らないからなのです。もしも、私たちが本当の飢え渴きを知れば、怠けてなどいられないはずです。

丁度、エジプトから脱出したイスラエルのように、真に空腹ならば、朝起きて砂漠一面に広がっている「マナ」を示された時、じっとしてはいられなくなります。毎朝出かけて

いって、どうしてもそれを得たいという熱心が自分の中に湧き出てくる。それは同時に、そのような御言に対する真剣な飢え渇きがないならば、心も体も働かないのだ、と言われているです。

では「なぜ御言に対する真剣な飢え渇きがないのだろう。なぜ神に対する情熱を失ってしまったのだろう」。ユダヤ教では、その答えがある意味で非常に明解なのです。ユダヤ教の『律法主義』と言われる思想の中に根本原因があるのです。また、今日のキリスト教会においても、それがあある意味では『教条的信仰』と謳われている神学的な一つの知識の修得によって、すべてのものをえり分けていこうとする傾向にあることに、原因があるのです。

(ユダヤ教における律法主義（外面的な夥しい律法細則の絶対遵守による救いの可否と厳しい裁き）と同様に、キリスト教の中の教条主義（原理・原則絶対主義の立場から、道徳的厳格主義などが貫かれ、定説・根本主義の立場で、一切の例外や臨機応変等は受け入れない主義、主張。故に、柔軟な思考や批判的精神とは対立的立場）から派生するキリスト教の教条主義的信仰も、こうした立場や主義を貫くには、古来から、または、ある時代から始まった、原理・原則の遵守に基づく、規律や神学的知識が要求される。今日では、こうした立場が独自の、更には独善的などと、批判的に解釈されることもあるようである。 森)

つまり、生きた信仰ではなく、「パターン化した信仰」があなたがたのものになっているからなのです。「今、神が私に何を求めているか」をお聞きしようとししないで、神は私を役立つように創られたのだから、私はいつでも役立つようにできているのだとタカを括る。神は私を選ばれたのだから、私が生き、私が動いていさえすれば、神が選ばれたという責任において、神は私をうまく取り計らってくださる、だから、それでいいのだという他人任せの姿。正に「おとなでなく、ことなの姿」、そんなものがイスラエルの中にあり、今日の教会の中にあるのです。

そういうところに、あなたがたの信仰も留まり続けていませんか、という提言がこの部分で語られていることなのです。そうだとすると、これは聖書が私たちに語っている真理からはかけ離れ、真の信仰から外れたところで、「自分のために神を信じている」という姿が、如実に示されているのではないかと、襟を正されます。

あなたがたの信仰は形骸化してはいませんか、信条的なもので、自己満足していませんか。

もしそうだとしましたら、あなたがたには良いものと悪いもの（善悪）が見分けられなくなります。、そして「自分の信条と合うものを、良いものと断定する」と決めつけてしまいがちな傾向を、どう考えたらよいでしょうか？

＜イエスが“良いこと”と考えられたこと＞

ところが、主イエスが3年間の公生涯を歩まれた中で、良いとお考えになったのは何だったかと

言う、十字架上の御自分ではなく、「相手がそのことによって生きる、それが良いことである」とされたのです。更に、御自分が聖霊としてそこに臨在されることによって、「相手が活き、喜び、感謝し、希望が持てたら、それが良いことなのだ」と。更にイエスは、たとえ、わたしが、見捨てられても、踏みつけられても、排除されても、「相手がそのことによって生きられたら、それが良いことなのだ」とまで、言い切っておられるのです。

私たちはそういう意味では質的に良い教会を造らなければなりません。そして、多くの人たちがそのことによって喜び、感謝すれば必然的に、あのペンテコステの日のように三千人もの人々がそこで洗礼を受ける状況が起こって来るのです。

あれは使徒たちが良いことをしたからではなく、聖霊によって語らしめられた言葉が真っ直ぐに相手の心に働きかけて、その人が喜びを感じ、感謝し、生命を感じたから、彼らは洗礼を受けたのです。

教会は「どうしたら洗礼を受ける人を増やせるか？」という、技術的なノウハウばかりを考えて、「相手を心の底から揺り動かす程の喜びを与えることを忘れてはいないか？」というのが、ここに書いてあることの主意ではないかと思います。

今はインターネットの時代だから「教会の恵みの情報を、ネットで見られるようにする。そうすれば、沢山の市民がそれに目を触れることができるようになるだろう。これは素晴らしい」と考える人も沢山います。

イエスの伝道もある意味では、一人対一人でない、大勢の人たちに伝道するやり方が多くあったのです。ところが、イエスは、ときとして、わざわざ一人のところにしかけての伝道も行われたのです。何故でしょうか？

それは、信仰というのは人格的な出来事だからなのです。人と人とは隣人として付き合う時に生まれて来る「一つの新しい出会い」もしくは「その仲介」なのです。

勿論、そういうことの素地作りにインターネットを使うことは少しも悪いことだとは思いませんが、そうやって一度に沢山の人を救えるというのであれば、「あなたもそうやって救われたのですか？」と、発言した人にちょっと聞き返したくなります。信仰へのきっかけとなるものは様々でしょうが、それを個人個人に応じて、丁寧に大切に育まなければ、本来の信仰には至りません。

よく「聖霊が働かれなければ何事も起こらないという謙慮さ、それが欠落している」と言われます。別な言い方をすれば、「その人の信仰の中で、聖霊の力によって今日を生きている、という信仰が欠落しているのではないか。」という、ある意味、当たり前のことを、その時強く感じたのです。

第6章1節、2節

だから私たちは、①死んだ行いの悔い改め、②神への信仰、③種々の洗礼についての教え、④手を置く儀式、⑤死者の復活、⑥永遠の審判などの基本的な教えを学び直すようなことは

せず、キリストの教えの初歩を離れて、成熟を目指して進みましょう。

本当に大事なものとして、「あなたがたも知っているように」と言って、「使徒の教え=ディダケー」と呼ばれているものの中に出て来る事柄を幾つか取り上げます。ここには6つ出て来ます。

第一は、「死んだ行いへの悔い改め；コンバージョン」です。

「死んだ行い」というのは別に役に立たなくなったとか、時代遅れになったという意味ではなく、「信仰的な命」を欠落させた行い、聖霊を無視してしまった行為、私たちの知恵や力や経験だけに頼った行為、この手紙が書かれた時代でいえば、律法であり、慣習であり、教会の形骸した儀式であり、そういったものが「死んだ行い」であると断じているのです。

現代で言えば、ここを押せば、自動的にこうなるといった、マニュアル化されてしまったものが、ある意味では「死んだ行い」でもあるわけです。

第二は、「神への信仰」です。

すごくこれは大事です。単に、あなたの信仰とか私たちの信仰ではないのです。「神への信仰」、あなたの信仰は何に拠っているのですか。何に向けて信仰は働いているのですか、とここでは問われているのです。

別な言い方をすれば、「イエス・キリストにあなたのすべてがかかっていると信じて、今を生きていますか？ あなたが語り、生きていることは、キリスト・イエスなしでも、できることなのですか？」と問われています。「キリスト・イエスなしにはできない」ときっぱり答えることによって、私たちのすべての言動が貫かれること、それが、ここで言う「神への信仰」なのです。

第三は、「種々のバプテスマについての教え」です。

これはご承知のように、この時代はユダヤ教からキリスト教への立ち返りをあらわすバプテスマの他に、自分たちが神の前に犯した罪の一つの贖罪の仕方としてのバプテスマがありました。

あるいは、自分たちの義を主張するためのバプテスマがオリエント宗教の中にあっただのです。

このように色々なバプテスマがあるけれども、「本当に私たちが受けなければならないバプテスマは、『御父と御子イエス・キリストとの名による聖霊のバプテスマ』なのだ」ということをきちんと知っているかどうかなのです。

洗礼の儀式が大事なのではなく、「そこに父・御子から発する聖霊が働かれて、あなたを新しくしてくださるという経験、古いあなたが本当にそこで死んでいるかどうかという問題、それがこのバプテスマの中では問われているということをきちんと覚えなさい」ということです。

第四には、「手を置く儀式=按手」です。

本来教会のバプテスマは、今はこの按手ということと平行して行われています。洗礼を受けた者、それは牧師が手を置いて信仰生活に入ったことを承認していく、あるいは、信仰生活が全うされるように祈っていく、ということをするわけですから、このバプテスマは平行して行われていますけれど、当時の教会では洗礼を受けることとは別個に、按手することが守られていたのです。カトリック教会では今でも洗礼と按手はそれぞれ礼典として別にあります。

洗礼とは私どもの教会で言うなら求道の決意をすることであって、按手を受けることは洗礼を受けることと同じように、今、カトリック教会では、二段階に位置づけられていますけれども、そういう洗礼と按手がここでは問題になっています。

第五には、「死者の復活」です。

死者の復活の信仰は旧約の中にもあります。イザヤ書（26章）の中にも、あるいはダニエル書（12章）の中にも出て来るのです。勿論、イエス御自身がマルコによる福音書（12章）の中で死者の復活について語られています。あるいは、パウロがコリントの信徒への手紙一の第15章で復活の問題を取り上げていますが、教会の大事な一つの問題が死者の復活だったのです。

第六は、「私たちの人生は地上で終わるのではないこと」

神は死んだ者を甦らせ、生ける者はそのままの姿で神の御前でもう一度裁きの座に立たしめられるという、その後にある永遠の審判ということと結びついてゆくわけです。

これら6つの事柄は、信仰者において、きちんと定着していなければならず、それは既にあなたがたがマスターしているはずのことと、著者は言うのです。

ですから本来、もう一度、そのことについて教育を受け直したり、注意されたりするような必要はありません。それは初歩的な問題ですから。それなのに、あなたがたが今更、ガタガタしたり、右往左往したりしているとは、いったいどういうことなのですか、と戒められています。

ところが、私たちはその初歩のところで信仰が完結したかのように思い込み、これが分かり、これを信じ、このように生きていくことが立派なクリスチャンになったことだと思っています。が、そうではなく、そのことを土台にして、自由が得られ、新たに生きることが始まるのが、洗礼を受けたクリスチャンの生き方なのだと、その先の3節以下で語ってゆくのです。

第3節、

神がお許しになるなら、そうすることにしましょう。（2節の末尾「キリストの教えの初歩を離れて、成熟を目指して進みましょう。」の続き）

＜荒野に立ち帰る＞

私たちが聖書を毎日読む。それは、旧約の時代によく言われたように、『荒野に帰れ』という、あの荒野に立ち帰ることです。しかし、荒野に立ち帰ると言っても、初歩に戻るこ

とではなく、荒野において導かれた神の恵みを信じ、共有し、そこから今日を生きることと結びついて行かねばなりません。

言い換えると、そのことのゆえに、今日を自由に生きられる。今日を神が与えてくださった「恵みの時」と信じて立ち上がることが、荒野に立ち帰ることなのです。ところが「荒野に帰れというから荒野に帰って、もう一度祈りつつ、神の言葉を待っています」というような考え方をしたのでは意味がないと、ここでは言われているわけです。

第4節、

一度光に照らされ、天からの賜物を味わい、聖霊にあずかるようになり、

この「**一度**」という言葉は、ものすごく大事な言葉なのです。新約聖書の中ではおよそ15回程使われています。そのうちの8回がこの手紙に使われています。そういう「一度」なのです。

別な言い方をすると、この「一度」というのは決定的な一回、丁度私たちが母の胎を出て誕生したという「一度」なのです。もう元へは戻れないのです。その「一度」は決定的な一回であって、しかも私たちの全生涯を通して一回しか起こりえない、かつ逆戻りができない一回なのです。

(ものすごいお恵めなのです。)

「一度神の光に照らされる」、「一度天からの賜物を味わう」、「一度神の聖霊にあずかる」、ということは、そこで全く新しい事態が展開される、後戻りできない状況の中で私たちが生き始めたこ

となのです。信仰とはそういうことなのです。聖霊による悔い改めとはそういうことなのです。

第5節、6節

神のすばらしい言葉と来るべき世の力とを体験しながら、その後に墮落した者の場合には、再び悔い改めに立ち返らせることはできません。神の子を自分の手で改めて十字架につけ、侮辱する者だからです。

これは、「一度キリスト者とし新生した人間は、二度この世に生まれ直すことはできない、だから一度新生したことが間違いだった、失敗だったと気がいたら、あなたの生涯は永遠に間違いであり、失敗でしかないのです、やり直しがきかないのです」ということなのです。

これはすごい言葉だと思いませんか。「一度救われたことが確固たるものとして打ち建てられたとするならば、それはあなたがたの一生を支配するものです。もしあれは間違いだったのだと感じたとすれば、あなたがたの一生は間違いでしかないのです。」とも言っているのです。こういう厳しさ、激しさを飛び越えて、私たちは新約聖書の中に生きていますから、余り感じないのですね。

旧約聖書の中で生きてきた、当時の信仰をもったヘブライ人たちには、このところが良く分かるのです。 神との『一回の契約』は、差し替えが効かない、ということ。

<自由と贖いの契約>

この手紙では、やり直しがきかないから、神の言われた通りに従う中で、私たちは生きています。そして、それは日々、神によって新しくされることによって造り変えられ、生きていて、昨日のあなたは問われない。あなたが前に進む限り、後ろに残して来た足跡を神はご存じだけれども、そのことのゆえに、神はあなたを追求はしない。だから、前に向かって進むことが唯一つの救われる道であるし、そして前に進むことをし続ける限り、神はあなたを恵むと約束してくださったから「自由」ではないか、という、その「自由」なのです。

それで、聖書の神は、「今、わたしの言葉に従って歩み続けている限り、その以前がどんなであろうと、わたしはそのすべてを知っているけれども、不問に付しましょう。」と。今、あなたが忠実に神の言葉に従って生きているならば、起訴されるよりは、今日を主のために生きた方がいいわけです。投獄されるよりは現実の中で、歴史の中に私たちの歩みを綴った方がいいわけです。だから、あなたがたは拘束され、投獄されなければならない所から解放されているという意味において「自由」なのです。

キリストの御言に従って生き続け、一度救われたら決定的なものだから、それに従い続けている限りでは、私たちの冒した『罪の責任は問われない』ということが、『贖い』という御業の中にはあります。従って贖いは、神との契約において私たちの救いとなるのです。そういうことで契約というのは「信じてお受けすること」です。神だけを自分の生きる拠り所「よすが」とすること、神の御言だけに自分の存在を託すこと、それが「贖いの契約」なのです。

そのことによって、あなたの過去は不問に付され、聖霊冒瀆を除くあらゆる罪責から自由にされることがここでは述べられています。「だから、自分がもう一度過去に戻って、その時点の利得で生きようとするなら、あなたがたのその「自由」はなくなり、もう二度と悔い改めることはできなくなりますよ」と言っているわけです。そしてその結果、「あなたがたは神の御子をもう一度、十字架に磔ることにもなるのですよ」と、正にそのことを言っているわけです。

第7節、

土地は、度々その上に降る雨を吸い込んで、耕す人々に役立つ農作物をもたらすなら、神の祝福を受けます。しかし、茨やあざみを生えさせると、役に立たなくなりやがて呪われ、ついには焼かれてしまいます。

神はこの地面に託して、すべての植物を生えさせ、育ませることをお命じになった。神は雨を与えてそれを助け、日を照らさせてそれを成長させ、神の豊かな憐れみによってこれを支えてくださり、土地が成長させたのだと認め、祝福してくださる。しかし、雨を受け

ても無駄に流し、日を受けても豊かな命をそこに育まないならば、その土地は荒れ地になって捨てられます。

神がお召しになり、神がお与えになり、神が支えてくださっている地面は、神の恵みにお応えして生きようとするならば、いよいよ豊かに神に感謝でき、祝福を与えられますが、「御言に応えようとしないならば、呪われて、焼かれてしまいます」と書いてあります。

恵みに応えて生きるとは、神の祝福を受けるために不可欠な条件です。元々土地に植物を成長させる十分な力があるのではなく、神が恵みとして雨を与え、日を照らして下さることによって成長します。土地にされたように神はその恵みを、あなたのものとしてくださいます。それが祝福なのです。

「私に出来たから、私が一人でやったのではないです。隣の荒れ地になっている地面と私の肥えた地面とは元々同じ地面なのです。なぜ差ができたかと言うと、神がくださった恵みに応えたか応えなかったかだけなのです。神が与えてくださった使命に応えたかどうかだけなのです」と、ここでは語るわけです。

あなたがたは「恵んでください、恵んでください」と願いながら生きているけれども、神に応えようとしていない限り、荒れ地になりますよ、いくら雨を降らせても、それを受けて他の者にも与え、一緒に育もうという気持を持たなければ、その恵みの雨は地表を流れて、やがて見え失せてしまいます。何も成長させられないのです、と著者は告げているのです。

私たちに信仰の実が実らないとすれば、それは神の恵みに応えようとしていないからなのです。自分のために恵みを求めているからだ、と言えるかもしれません。今日の部分ではそんなことが書かれているわけで、中々大変な問題なのです。

最後に一つだけ付け加えておきますと、「信じて洗礼に与ってから、信仰を離れて行く人々が、今ここに出てくるわけですが、私たち自体は信じて離れて行こうなどと少しも思わないのです。

けれども、私たちが私たちなりの歩みを展開しようとする、どこかでキリストなしにでも生きていけると感じるようになる、そういう誘惑、あるいは、神への反逆を促すこの世の力が私たちを取り巻いています。だから、四六時中、神の語られる御言に耳を研ぎ澄まし、自分自身の全霊をそれに注ぎ込んで聴き、適切にお応えしなければならないのです。それを怠ると墮落しますよ」と言っているのです。それが、今日の箇所です。私たちに与えられた警告なのです。

この言葉が真実であるかどうか、私たち一人一人が体験してみなければ分からないことでしょう。著者は旧約の先達を挙げて、それは確かだと後で説明してゆきます。「では、あなたはどうか？」と私に問われれば、私は、神に応答しようとして無我夢中で生きてきた人生を振り返ってみて、「間違いない、それは真実です」と断言できると思います。

そのように、「御言を聴いて行わなければ、私たちの信仰は価値のない、値打ちのないものになりますよ」という辺りは、その通りですと言える自分たちがあるのですが、「神に従って生きれば、豊かな実を結ぶ」という辺りになると、即、アーメンとは言えない弱さがあり、私たちもまだそこまで行っていない状態ですから、恵みにあずかって信仰の教師なる「ベテラン」になれるような歩みをしなさいとの著者のお勧めを、私たちへのお勧めとしても真摯に聴いて歩みたいと思います。

1996年10月12日 松山幸生

「神の栄光を悟り、この身に主の命が現れるため」

コリントの信徒への手紙二 4：1－12

森 容子

今回の説教の第一のキーワードは、「**栄光；ドクサ**（威信、榮譽、誉れ、輝き、栄化、栄華とも）」です。しかも、その栄光は、この世のものではない「神の栄光」ないし「キリストの栄光」なのです。しかしながら、クリスチャンの持つ栄光と特権を掲げれば掲げるほど、反面、その人を傲慢にさせるという問題点を、パウロは指摘せずにはおられません。

それで、「**死と命（ゾーエー）**」というインパクトある単語が第二のキーワードとなっています。死については二通りの言及があり、一つは**ネクローシス**；他者に殺される死を含め、弱さを抱えたままの生身の人間としての肉体の死、もう一つは**サナトス**；信仰において、主なる神様を高く掲げるべく、自我に死ぬ死が提示されています。

1 こういうわけで、わたしたちは、憐れみを受けた者としてこの務めをゆだねられているのですから、落胆しません。

「**こういうわけで**」とは、一体どういうわけなのかと申しますと、3章の終わり17－18節に素晴らしい聖句があります。「**主の霊のおられるところに自由があります。わたしたちは皆、顔の覆いを除かれて、鏡のように主の栄光を映し出しながら、栄光から栄光へと、主と同じ姿に造りかえられていきます。**」と。この「**造りかえ**」によって、主の栄光を映し出すようになった自らを誇るのではなく、主から、かように多大な憐れみを受けた者として我が身を捉え、すべての栄光を主に帰するという、「これぞ遜り」という様相を、パウロは提示しているのです。

その上で、宣教、伝道、奉仕などの務めを主から仰せつかっているという自負をもって事に当れば、どんな結果に対しても「**落胆しません。**」と胸を張れ

ると告げるのです。この世は結果オーライが横行していますが、主は結果より、動機付けや努力の過程を大切に下さるからです。

もしも、残念な結果に傷ついて、自分の努力が足りなかった、自分の計画が甘かった、自分のやり方が間違っていたと、その責任をすべて自分に帰して、自身を追い込んでいくなれば、潰されてしまうでしょう。その位、教会の宣教、伝道、奉仕は、困難を極めることがあります。

ですが、本質的に、主の御言を語る宣教は感動、主の御救いを伝える伝道は喜び、主の御心にお仕えする奉仕は感謝なのです。これらは、他ならぬ聖霊と共に行わせて頂く、いとも美しい務めであるからです。

2 かえって、卑劣な隠れた行いを捨て、悪賢く歩まず、神の言葉を曲げず、真理を明らかにすることにより、神の御前で自分自身をすべての人の良心にゆだねます。

いよいよコリント教会の信徒たちの耳と心が開いてきたところで、パウロは、第一コリントの手紙のように、「**悪賢く歩まず、神の言葉を曲げず**」と勧告します。そのような「**卑劣な隠れた行いを捨て**」、その代わりに、神の真理、即ち、キリストの十字架と復活を仰ぐ信仰による救いを、真っすぐに明らかに差し示すことによって、すべての人々の良心に訴えかけ、神様の御前で、キリスト者として自己推薦しようではないかとパウロは奨励しているのです。

3-4 わたしたちの福音に覆いが掛かっているとするなら、それは、滅びの道をたどる人々に対して覆われているのです。この世の神が、信じようとはしないこの人々の心の目をくらまし、神の似姿であるキリストの栄光に関する福音の光が見えないようにしたのです。

ここに表された「覆い」は、この世の暫定的な主、即ち、サタンの手によるもので、キリストの十字架や復活が信じ難く、信仰を躊躇している人々、更には、主の真理、主の福音を受け取れず、滅びの道を辿ろうとしている人々に、そのまま、彼らの目や心が開くことがないように、サタンは覆いを掛けるのです。恐ろしいですね。それを掛けられた本人たちは、サタンの真っ黒い覆いが見えないのですから・・・。

この黒い覆いの効果はてきめんです。先程の「**鏡のように主の栄光を映し出しながら、栄光から栄光へと、主と同じ姿に造りかえられ**」た人々が発する「**神の似姿、キリストの栄光、福音の光**」が覆い尽くされ、彼らの目は、霊的な盲目状態とされてしまうからです。

それに引き換え、

5 わたしたちは、自分自身を宣べ伝えるのではなく、主であるイエス・キリストを宣べ伝えています。わたしたち自身は、イエスのためにあなたがたに仕える僕なのです。

これは、マタイ福音書16：24等で、「**わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。**」と招かれる主に、誠実にお従いし、心からお仕えしているキリスト者の姿です。イエス様にお仕えするとは、イエス様が愛される方々の僕となって、誠心誠意、お仕えする道でもあるのですね。

6 「闇から光が輝き出よ」と命じられた神は、わたしたちの心の内に輝いて、イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光を与えてくださいました。

「**闇から光が輝き出よ**」と命じられた神」とは、始めに天と地とを創造され、その第一日目に闇と光とを分けられた、創造主であられる父なる神様ですね。また、闇から輝き出た光とは、御言ロゴスなる神、十字架と復活の贖い主であられる御子イエス・キリストを表しています。そして、「**わたしたちの心の内に輝いて、イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光を与えて**」下さるのは、まぎれもなく、私たちの救い主であられる聖霊です。このフレーズは、三つの位格にして一体なる神様を告白する、本当に美しい聖句です。

では、「**イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光**」について、もう少し踏み込んで考えてみたいと思います。

聖書の御言をひもときますと、神の栄光については多々ありますが、特に1テモテ 6：15－16に、「**神は、定められた時にキリストを現してくださいます。神は、祝福に満ちた唯一の主権者、王の王、主の主、唯一の不死の存在、近寄り難い光の中に住まわれる方、だれ一人見たことがなく、見ることのできない方です。**」とあります。

また、キリストの栄光については、ヘブライ書 1：3に、「**御子は、神の栄光の反映であり、神の本質の完全な現れであって、万物を御自分の力ある言葉によって支えておられますが、人々の罪を清められた後、天の高い所におられる大いなる方の右の座にお着きになりました。**」とあります。

そして、そのような栄光を悟る者たちについては、1コリ2：6－7に、「**わたしたちは、信仰に成熟した人たちの間では知恵を語ります。それはこの世の知恵ではなく、また、この世の滅びゆく支配者たちの知恵でもありません。わたしたちが語るのは、隠されていた、神秘としての神の知恵であり、神がわたしたちに栄光を与えるために、世界の始まる前から定めておられたものです。**」とあります。

パウロにとっての「救い」とは、神の栄光の内にある本質（例えば、キリストの神的出来事における神の救済的愛の中に立ち現れる本質）に与ることです。つまり、死後の私たちの体は、天に上げられたキリストの「**栄光の体**」と同じ体に造り変えられ、そのとき、私たちの存在の在り方も、愛と真実なるキリストの「像」と同じ像に造り変えられるというのです。これが、聖化、栄化と言われる変容です。

そして、栄光への決定的な変容は、キリストの十字架の愛の具現による栄光の輝きをしっかりと見つめることにより生まれ、パウロ自身、この変容の中を生き、かつ体験しました。よって彼が伝える福音は、その変容を仲立ちとして、御父の世界創造時における「原初的な光」に比肩するキリストの光、「**キリストの栄光**」を、世に提示することなのです。

それゆえパウロは、このキリストの霊に仕える務めは、落胆すべきものではない、いや、「既に、栄光に満ち溢れている！」と公言するのです。

7 ところで、わたしたちは、このような宝を土の器に納めています。この並外れて偉大な力が神のものであって、わたしたちから出たものでないことが明らかになるために。

パウロが言う、脆い粗末な土の器に納めている「**宝**」とは何でしょう？ 分かり難い場合は、とりあえずその前段を引いてみることでですね。前段6節に「**わたしたちの心の内に輝いて、イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光**」という、とてつもなく偉大な宝のことが記されています。この光、この宝とは、端的に言えば、「聖霊なる神様」のことであることがお分かりになるでしょう。

聖霊は、激しい風雨に遭えば、たちまち崩れ落ちそうな「あばら家」ないし「掘っ立て小屋」のごとき脆い粗末な土の器なる人の心の裡に、憐みをもって宿って下さり、そこに、神の聖き「神殿」を堅固に打ち立てて下さるのです。これぞまさしく、一方的な神様のご恩寵です。

御子イエス様が二千年も前、日本の弥生時代に、滅びに至るはずだった私たちの命を救うため、贖いの十字架にお架かりになり、そして三日目に死からの復活を遂げられたという主の栄光の出来事は、聖霊のお導きなしに信じることは決してできません。この「キリスト信仰」は、私たち自身の業ではなく、裡に宿られる聖霊の御業であり、その人に聖霊が内在することを証しするものです。ですから・・

8-9 わたしたちは、四方から苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない。

と、はっきり断言しうるのです。私たちの人生に、この聖霊による保障の他、

どんな保障がありうるのでしょうか。「いやいや、私には家族がいる、隣人がいる、社会保障制度がある、医者がある、カウンセラーがある、お寺がある、神社がある、ご先祖様がある・・・」と数え立てても、実際、あなたの心と身体が行き詰まって、断崖絶壁のような死の淵に、ひとり立たされて苦しみ悶えるとき、誰も、何一つも、そんなあなたを丸抱えにして、助け出せはしません。

テレビ映画で『クオ・ヴァディス・ドミニ（主よ、どこへ行けばよいのでしょうか？）』を見たことがあります。古代ローマのネロ皇帝がクリスチャンに対し、常軌を逸した残虐な大迫害を繰り広げますが、最後には、聖霊による劇的などんでん返し勝利が描かれていきます。

パウロやペトロが教会の指導者として登場しますが、題名の「クオ・ヴァディス（私はどこへ行けばよいのでしょうか）」はペトロの言葉で、ネロにつけ狙われる危険なローマを脱出する途上で、突如現れられた主にそう申し上げると、「わたしがあなたの代わりにもう一度十字架に架かろう。」と返された御言に心打たれて、ペトロは意を決して引き返していきます。そして、ローマ軍に捕らえられたペトロは、自ら望んで逆さ十字架につきますが。その処刑は、何とも壮絶極まりないシーンでありました。

また、映画には「メメント・モリ（なんじの死を覚えよ）」という言葉が何度も出てきましたが、その言葉だけでは意味が半分で、「メメント・クリスト（キリストの死を覚えよ）」という言葉をつけ加えなければならない、という発言も出てまいりました。

そして、権力の頂点にあるネロの奸計により、ローマの大火の濡れ衣を着せられたキリスト者たちが大勢捕らえられ、闘牛場のコロシウムに引きずり出され、興味津々のローマ市民たちが笑いさざめいて見物する中、次々と飢えたライオンの群の餌食にされ、火あぶりにもされてゆくという、目を覆うばかりの残酷シーンが続きます。

ですが、その地獄絵図のさなか、信者たちは死の間際まで主をほめ讃え、皆で斉唱する讃美歌の美しい調べが、血と業火にまみれた大コロシウムに響き渡ります。これら多くの信者が微笑んで主の御許へ旅立っていった姿に、死を確認するネロの兵士たちが驚愕します。

そしてついには、パウロの大説教と共に、ローマ市民や兵士をも味方につけた奇跡的な大逆転劇が生じ、ネロとその悪妻が惨殺され、政権交代が起こります。その先は、キリスト教がローマ帝国の国教にもなったという、驚くべき実話に基づいて制作された映画です。

皆さん、悪や苦しみが極まった時、この映画のように、聖霊は必ずや真摯な祈りを聞きあげて下さり、私たちをそのどん底状態から、驚くべき神の御業によって、救い出して下さるのです。そのために、必要な助け手を用いられるのも、聖霊の貴いお働きです。

さてここからは、冒頭でお話しました、第二のキーワード、死と命のお話です。

10 わたしたちは、いつもイエスの死（ネクローシス）を体にまとっています、イエスの命がこの体に現れるために。

キリストの教会という所は、常に死をまとっている場所であると言われます。教会が「死」をまとうことの意味は、人類が、ありうる何か、神の御子を十字架刑にて殺害したという、地上の歴史上、後にも先にもこれ以上はない大罪を冒した負い目（罪責）を、主御自身がすべて担われたことに「ひれ伏す場」であるということです。

そして、その死が、天のみ父への唯一完全な和解の捧げものとなられたことを信じ、その贖いの御業を自分の罪のゆえと懺悔し告白する者に、死後の世界、天の御国への凱旋と永遠の命を主が確約して下さることを「告げ知らせる場」であるということです。

ですから、教会がまとっている「死」とは、縁起が悪いと忌み嫌うものではなく、むしろ、私たちを輝かしい神の御国へとつなげてくれる、新天新地への扉、まぎれなく「天国への門」なのです。私たちが礼拝で主を賛美する際の讃美歌の多くも、最後の段で、神の御国へのこよなき希望と主へ信頼が、美しく高らかに歌われています。

10節の最後の言葉「**イエスの命がこの体に現れるために。**」というのは、原典ではもう

少し詳しく「それは、イエスのいのちが私たちのからだによって明らかにされるためです。」となっています。つまり、イエス様の十字架の死と交換に、私たちに与えられたイエス様の御命が、私たちのからだを通して、即ち、日々の信仰生活を通して、明らかにされると言われています。 そのためには・・

11 わたしたちは生きている間、絶えずイエスのために死（サナトス）にさらされています、死ぬはず（スネートス）のこの身にイエスの命が現れるために。

この節は、単に10節の繰り返しのようには思われますが、そうではありません。10節では、主が人類に殺された「**死（ネクローシス）**」を身にまとって、覚え続けること、即ち「**自分のからだに十字架の死を持ち込むこと**」を述べていますが、11節では、その主を生かすために、自分に死ぬという「**死（サナトス）**」を自らに課しているということです。

そして、「**死ぬはずのこの身にイエスの命が現れるために。**」という言葉は、
原典では

「それは、イエスのいのちが、私たちの死すべき肉体によって明らかにされるためです。」

となります。つまり、自分の肉に従う生き方、何でもかんでも、私、私を主語とする生き方を廃棄することにより、イエス様が贖いとして差し出された御命の真価、貴さ、かけがえのなさが浮き彫りにされることが述べられています。

12 こうして、わたしたちの内には死（サナトス）が働き、あなたがたの内には命が働いていることになります。

コリントの教会員に、イエス・キリストを伝道する使命を帯びたパウロたちは「自分に死んでキリストに生きる」という在り方を徹底的に自らに課しています。そうし続けることにより、パウロたちの信仰に倣う人々にも、キリストの光なる聖霊が現れ出て働きを始められ、キリストの命に生きるようになる、と述べているのです。

しかし、いくら熱心にキリスト教の教理、教説や、信仰生活の理想論を説いていても、語っているその人自身が、言行不一致の生き方をしておれば、人はついてきませんし、真の伝道はできません。 「その身に主のいのちが現れるように生きる」そのことが、信仰と伝道の要であると、パウロは明言しています。

写者あとがき 1 2022年5月

私は「基本的な教えを学び直すことはせず、キリストの教えの初歩を離れて、成熟を目指して進みましょう」という歳になってきた頃、聖書を離れ、礼拝をおろそかにしてきました。そして離れること、おろそかにすることが強くなればなるほどに、このヘブライ人への手紙第5章から6章にかけてのみ言葉が強く襲いかかって、恐怖を感じ、布団をかぶって一時の恐怖を逃れる子どものように、必死で仕事という分厚い布団を被って逃れていました。

「一度光に照らされ、天からの賜物を味わい、聖霊にあずかるようになり、神のすばらしい言葉と来るべき世の力を体験しながら、その後に墮落した者の場合には、再び悔い改に立ち帰ることはできません。神の子を自分の手で改めて十字架につけ、侮辱する者だからです。」（6章④～⑥）

日常生活ではどんな闘いの中にあっても危機一髪の所で助けられ、豊かな恵みをいただき、その場その時では主に感謝していましたが、内面の真実な自己においては、罪責感が強化される一方でした。この世の目に見えるものの整理は、模範生のようにつけていまし

たが、「自分の義」にとりつかれ、「神の義」を忘れていました。いつかの時点で信仰の立て直しを図らなければならないと思いつつ、長い月日が過ぎて、80歳の誕生日を迎えました。

そして、主と松山先生からの豊かな憐れみとお恵みを頂いて導かれ、この「ヘブライ人への手紙に学ぶ」に直面させていただきました。

今回の10回に至るまでは、ただひたすら写書する、出来るだけ間違いなく写書することに専念してきました。未だ間違いは無くせませんが、確実に聖書の言葉や松山先生の講述が体に染み込む実感が湧いてきました。

それは、松山幸生先生から教わった御言の果実が点から線の形になり始めたこと。更に、松山幸生先生が講解される聖書の深い意味を森容子先生の毎月の丁寧なご指導によって理解できるようになったこと。加えて、3月から礼拝と聖書研究・祈祷会にあずかることによって、聖霊の働きを実感しつつあるということです。

礼拝の与り方については恩師から教わっていましたが実行しませんでした。聖霊の働きもあることは教わっていました。しかし、それは結果的な恵みを通して感じられ、感謝していましたが、現在、この時点での実感は、数えることができるほど少ないということでした。

それが、今や、「ヘブライ人への手紙に学ぶ」を写書させて頂くことで、主の深い憐れみと豊かな恵みを賜り、希望を持って学ぶことができるようになりました。

「わたしの言葉に従って歩み続けているならば、その前がどんなであろうと、わたしはそのすべてを知っているけれど不問に付しましょう。」今、あなたが忠実に神の御言に従って生きているならば、起訴されるよりは今日を生きた方がいいわけです。投獄されるよりは現実の中で、歴史の中に私たちの歩みを綴った方がいいわけです。だから、あなたがたは拘束され、投獄されなければならないところから解放されているという意味において、『自由』なのです。

これらのことも初歩的なことではありますが、私にとっては大いなる成熟への一歩です。今年を受難節から復活祭にかけて「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」を黙想しました。

「ヘブライ人への手紙に学ぶ」では第9回でした。諸先生方のご指導の賜物でございます。感謝でございます。

第9回の「写者あとがき」が書けなかったことを今ここで懺悔告白し、信仰の立て直しに向かって前進する喜び、安息日を待ち望む日々であることを記します。

小原靖夫

写者あとがき 2 2025年10月28日

5章11節からは、語調が一変しており、大祭司論が一旦中断して勧告に変わっています。勧告を振り返ってみますと「だから、私たちは聞いたことにいっそう注意を払わなければなりません。そうでないと押し流されてしまいます。」(2章1節～4節)、「今日、あなたたちが神の声を聞くな、神に反抗したときのように、心を頑なにしてはならない」(3

章7節～8節) そのように記した著者はキリスト論に続いて大祭司論を説き始めた。(4章14節から5章10節) そのところで、再び警告の語調になって「このことについては、話すことがたくさんあるのですが、あなたがたの耳が鈍くなっているので、」大祭司論を中断して、極めて厳し警告を発しています。

この場面を想像しますと著者は手紙ではなく、説教をしているように感じます。聞き手は第二世代のユダヤ人キリスト者、時は、ローマ皇帝の弾圧の最も厳しい60年代、この時代のキリスト者はユダヤ人からも迫害を受け、更にキリスト教の中に生じた異端論者との戦いという八方からの攻撃に晒されていた中で、ユダヤ教に回帰をしようかと心が迷っていたのでしょう。

著者(又は説教者)は目の前の聞き手の反応を見て、「あなたがたは今ではもう教師となっているはずなのに――」と厳しい言葉で、「成熟を目指して進みましょう」と勧告しています。この後の10章19節から30節、12章にも勧告が繰り返しています。その勧告の中に「御父がどれほど私たちを愛してくださるか、考えなさい。」「私たちは、今既に神の子ですが、自分がどのようになるかは、まだ示されていません。しかし、御子が現れるとき、御子に似た者となるということを知っています。なぜなら、そのとき御子をありのままに見るからです。」(ヨハネの手紙Ⅰ・3章1節・3節)

「一人前のキリスト者」になる難しさを著者は目の前にしながら、同じように迷える人間(私たち)に対し繰り返し繰り返し「十字架の出来事の基本」を説いていかねばならないと強調しているように思います。聞き手である私はこのことを体験していますから、この手紙の厳しさの前に慄き目を覚まして、その度に「あなたがたがわたしを選んだのではない、わたしがあなたがたを選んだ。」との御言に立ち返らせてくださっているのです。松山幸生先生の基本に立ち返った説き明かしを写書しながら、「さまよう人々、たちかえりて」(讃美歌239)を共に歌ったありし日を懐かしく口ずさむことができること、私たちの救い主イエス・キリストの父なる神に感謝です。

今回は森容子先生に「神の栄光」について説教をお願いいたしました。

「闇から光が輝き出よ」と命じられた神は、私たちの心の内に輝いて、イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光を与えてくださいました。」(コリントの信徒への手紙Ⅱ4章6節) 長い文章ですが、悟る光＝聖霊と教えていただき「三つにして一つなる神様を告白する、本当に美しい聖句です」と説き明かしてくださいました。

「主の霊のおられるところに自由があります。私たちは皆、顔の覆いを除かれて、鏡のように主の栄光を映し出しながら、栄光から栄光へと、主と同じ姿に造りかえられていきます。これは主の霊の働きによることです。」(コリント信徒への手紙Ⅱ3章18節)

「主イエスを復活させた神が、イエスと共に私たちをも復活させ、あなたがたと一緒に御前に立たせてくださると、私たちは知っています。」(コリント信徒への手紙Ⅱ4章1節) 冒頭で引用した聖句をもう一度味わってみたいと思います。

「私たちは、今既に神の子ですが、自分がどのようになるかは、まだ示されていません。しかし、御子が現れるとき、御子に似た者となるということを知っています。なぜなら、そのとき御子をありのままに見るからです。」（ヨハネの手紙Ⅰ・3章1節・3節）

このようにして「ヘブライ人への手紙に学ぶ」を写書させて頂きながらお二人の先生聲咳に触れながら紀元1世紀の世界にも導かれる学びに感謝しております。

2025年10月29日